

1 教師（学級担任）としての心構え

1 学級経営とは

学校における児童の人間形成や成長発達は、その多くが学級を基盤とする生活の中で行われます。この学級を基盤として、児童一人一人の成長発達が円滑かつ確実に進むように、学校経営の基本方針の下に、学級を単位として展開される様々な教育活動の成果が上がるよう、諸条件を整備し運営していくことが、学級経営と言われるものです。



2 学級担任の使命

学級経営は児童の人間形成に深く関わる創造的な実践活動です。したがって、学級の状態（人・物・教室環境等）や、児童の人間関係及び人間的な成長の姿は、学級担任の指導力に大きく関わってきます。

学級は、学級担任の意図的な手立てによって、次第に一つの方向に歩み始め、学級の雰囲気を作られていきます。学級のよい雰囲気は一朝一夕にしてできるものではなく、一日一日の積み重ねや担任の人柄、姿勢、一つ一つの場面での指導の在り方等が大きく影響します。明るい雰囲気を演出できる先生の学級は、自然に明るくなったり、感情に流される先生の学級は、何となく暗さが出てきたりすることがあります。

ひたむきな情熱、豊かな人間性に基づいて、一人一人を大切にしながら、児童の可能性を最大限に伸ばすように努力することが学級担任に課せられた使命です。

3 学級担任としての心構え

（1）学級経営案の作成（プランニング）

・学級経営を構想し、具体的に展開するに当たっての学級担任の設計図です。目指す目標や方向を明らかにし、各教科・領域、諸活動等の指導方針と計画、家庭との連携等、どのように教育を展開していくかを計画しましょう。

（2）言語環境を中心とする教室環境づくりを大切にすること

・教室の言語環境としては、様々な印刷物、板書、児童や教師の作成する掲示物等があります。また、学級担任をはじめとする教師の話言葉、児童同士の会話、教師と児童の間の会話、挨拶、言葉遣い等によって形成されます。教室の言語環境は、児童の学習活動や言語活動の充実のみならず、好ましい人間関係を築くための重要な役割を担っています。

・一番問われるのが学級担任の言語感覚です。一人一人の尊厳を傷つけるような言葉、相互の信頼関係を破壊するような会話に敏感になる必要があります。学級担任自身が、言語感覚を磨き、教室において交わされる会話を豊かにしていく存在となることを目指していくことが大切です。

（3）学級経営の評価

・学級経営の展開に当たって、個々の児童や学級集団全体の状態を判断して、その問題点を分析し、実践の改善に反映させていくことが大切です。その際、次の点を評価するとよいでしょう。

①一人一人の児童の心の居場所としての学級経営

「安全で安心して生活できる学級になっているか」「望ましい集団を育てる学級経営になっているか」

②一人一人の児童の学力を伸ばす学習指導の推進

「『聞く・話す』ことの指導が確実にできているか」「確かな学力と個人差に応じた取組ができているか」

③一人一人の児童の健全な発達を促す生徒指導の充実

「児童の心を育てる学級経営になっているか」「児童理解と問題行動への対応は確実にできているか」

(4) 学校生活における集団活動の発達的な特質を踏まえた指導

【低学年】

小学校への入学当初においては、幼児期の自己中心性がかなり残っており、児童相互の人間関係は少なく、教師と児童との関係が中心です。また、行ってよいことと悪いことについての理解はできるようにありますが、感情的、衝動的な言動が多く、入学期に小学校生活や集団生活にうまく適応できないことがあります。第1学年後半になると、教師を中心とする学級集団への所属感や一体感が現れ始め、小集団において仲よく活動することができるようになりますが、学級全体としてのまとまりは、まだまだ弱いのがこの時期の特徴です。

第2学年になると、活動の中心となる児童が目立ち始め、仲間の立場を認めたり、理解したりしようとする態度や、よりよい学級生活を築こうとする自主性等が高まってきます。また、小集団での協同的な活動ができるようになり、学級全体に目を向け、学校に対する所属感を少しずつ深めていくようになります。さらには、役割を分担して活動したり、きまりの大切さを認識して生活したり遊んだりすることができるようになります。

そこで、教師は、このような低学年の学校生活における集団活動の発達的な特質を踏まえ、就学前教育との関連を図りながら、小学校における集団生活に適応できるようにすることが大切です。そのためには、集団で活動する楽しさを味わわせたり、集団活動を通して約束やきまり等を守らなければならないことを理解させたりするなど、みんなと一緒に活動できるようにしたりする必要があります。さらには、学習や給食、掃除等、学校における基本的な生活の仕方を身に付けるとともに、集団活動を通して行ってよいことや悪いことを自覚できるようにすることが大切です。その他にも、友達の大切さを実感させたり、徐々に児童が学校での生活に慣れるようにしたりして、学校生活を楽しく送ることができるように計画的に指導することが重要です。

【中学年】

第3学年になると、集団の中の仲間としての結び付きが増大し、協力して楽しい学級生活をつくらうとする小集団による活動が盛んになります。しかし、指図する者とされる者が次第にはっきりしてきて、それぞれの仲間集団としての小集団が分立し、集団同士の対立や集団への付和雷同的な行動も見られるようになってくるなど、学級全体としてのまとまりが育ちにくい時期でもあります。集団活動を行うにしても、個人的な興味・関心や要求に動かされることが多く、その集団に所属する成員の間にはっきりとした相互依存の関係はあまり見られません。

第4学年になると、集団目標の達成に主体的に関わったり、協同の活動に取り組んだりして、リーダー的な児童を中心として、教師の力を借りなくてもある程度の計画的な活動ができるようになり、自分たちできまりをつくって守ろうとするなどの自主性も増してきます。また、男女の活動の違いも見られるようになり、男女別の小集団もつくられるようになります。

そこで、教師は、このような中学年の学校生活における集団活動の発達的な特質を踏まえ、児童の集団活動に対する強い興味・関心の出現、自発的な活動への要求の高まりなどを生かし、自分の行動や集団活動の成果や反省を踏まえて、楽しい学級生活づくりのための係活動などの協同の活動の充実を図ったり、望ましい人間関係を築く態度を形成するための活動を充実させたりする必要があります。また、生活や遊びのきまりをつくって守る活動や、よりよい生活を築くために集団としての意見をまとめるための方法等を話し合う活動ができるように指導することが大切です。

【高学年】

第5学年になると、集団の活動目標を大切にし、これを達成しようとする意識が強くなり、学級全体としてまとまった活動を行うことができるようになります。また、互いに信頼し支え合って活動することを強く求めるようになり、集団としての実践や自分の言動について振り返り、改善するなどして、よりよい生活を築こうとする意欲が高まってきます。その一方で、思春期にさしかかるこの時期の児童の価値観は、ときに一面的で独断的な傾向になりやすく、相手に批判的になったり自分の価値判断に固執しがちになったりします。また、他者と自分を比較して自分に自信がもてなくなったり、些細なことで友達との関係が壊れたり、友達への不信感をもったり傷付いたりして、悩みや不安を感じるようにもなります。

第6学年になると、児童会活動やクラブ活動等において中心的な役割を担うようになり、最高学年としてリーダーシップを発揮しようとするなどの意識や態度も育ち、役割や責任を自覚して活動するようになります。また、思春期特有の不安定な感情がより大きくなり、人間関係に悩んだり、先頭に立って活動することに消極的になったりする児童も少なくありません。

そこで、教師は、このような高学年の学校生活における発達的な特質を踏まえ、高学年としての役割や責任を果たしたり、最高学年としてリーダーシップを発揮したりする活動を多様に設定することが大切です。また、多様な他者を認めることの大切さを実感できるようにしたり、友達の大切さを経験を通して理解できるようにしたりすることも大切です。特に、この時期に自分への自信が大きく低下する児童が多い傾向にあることを踏まえ、高い目標をもって様々な役割を担う体験を通して、困難を越えて目標を達成できるようにしたり、このことについて互いが認め合えるようにしたりして、自分への自信がもてるようにすることが大切です。

【参考文献】小学校学習指導要領解説 特別活動編(平成20年 文部科学省)